

新 歌人群像

平野萬里

生き永らへてなほ明日を待つ

今野寿美



新詩社の期待の星

平野萬里ひらのばんりが与謝野鉄幹てつかん率いる新詩社に入つたのは明治三十四（一九〇一）年、十六歳のときのことであった。機関誌「明星」を前年の四月に創刊したばかり、この年には『みだれ髪』の刊行が話題を集めるといふ具合に、浪漫派を誇る歌人たちが最も華やいていた時期である。萬里の父は教職にあったが、母が森鷗外の長男を里子として預かるかたちで森家と関わったり、中学校では教師だった土井晩翠ばんすいの影響を受けるなど、文学的な環境に恵まれていたようだ。萬里の作品は翌三十五年一月号から「明星」誌面に登場している。

ここにまたさと吹く風の逐はれ銀杏いちょうつひのさだめの二人と笑みぬ

はたとせのうらぶれをとこ春にあひて
今日けふバイガルの雪に西する

ごく初期の作として明治三十五年二月号と三月号の「明星」から引いた。それぞれ与謝野晶子と鉄幹の感化を濃厚に受けたうたいぶりであることが興味深い。同じ年の十月号から作品を寄せるようになった石川啄木は萬里より一歳若い、盛岡中学時代にやはり『み

だれ髪』の影響如実な歌を詠んでいる。今の目で見れば模倣というに近いほえまじさだが、青年たちが晶子の歌に新しい表現スタイルを察知し、短歌表現の可能性を見て取ったことの意味は小さくなかったといつていい。萬里の初期作品にしても、用語の近代性や夢想の匂いを漂わせる情調、独特の言い回しに反映させた修辭の力量は、その後の作品の品格ある音楽性や美意識の際だつ描写力となつて定着している。鉄幹・晶子との終生変わらなかつた師弟関係によつてよく知られ、語られもする萬里だが、生來の萬里自身の志向と新詩社の詩精神とは、おのずとなじむものだつたに違いない。

なお、先の二首はいずれも「平野孤影」の



群馬・赤城山吟行の新詩社一行。左より大井蒼悟、与謝野寛、伊上凡骨、高村光太郎、石井柏亭、平野萬里（1904年）

歌集『若き日』刊行

筆名で出詠されている。ちなみに本名は久保ひさやすだが、明治三十七年に「萬里」を名乗つて以降もいくつもの筆名を用いたらしい。三十八年、東京帝国大学工科大学応用化学科に入学。卒業後は化学工業の推進に尽力し、ドイツ留学をはさんで大正期には農商務省に出向、数々の役職を務めた。鷗外は化学の道に進んだ青年萬里を可愛がり、明治四十年三月に始められた鷗外宅における觀潮樓歌会には、萬里もその第一回から佐佐木信綱、与謝野寛（鉄幹）、伊藤左千夫らとともに参加している。

萬里が上梓した歌集は明治四十年三月の『若き日』一冊のみである。勤務との両立が困難であつたと推察される十一年ほどの中断期間があるとはいえ、四十五年にわたる歌人としての活動実績からすれば意外なことではある。今日、『若き日』は筑摩書房『現代短歌全集』第一巻によつて目にすることができるところの、以降の作品については雑誌発表をたどるほかに、それだけに平成十六（二〇〇四）年十月、子息平野千里氏によつて萬里の歌業を集成した『平野萬里全歌集』（砂子屋書房）が刊行されたことはまことに喜ば

しい。収集された作品は四千百首あまりという。「若き日」収録作も含め、萬里のほぼ全作品が初出の年代に従つて配列されている。卷末の佐佐木幸綱氏の「平野萬里論」および千里氏の「あとがき」も懇切に歌人萬里の姿を浮かびあがらせており、近代の浪漫派の活動や作品について教えられるところが多い。全作品が年代順であるから、萬里の歌のさまざまなを知るのと同時に、作風の移りゆく流れをそのままたどることができる。

あやしむな詩はみな恋のいかり火のわが胸裂けて生れたるもの

全歌集巻頭から三首めに置かれていることからすれば、おそらく最も若い頃（十八歳頃）の作といつていいのだろう。詩とは恋の炎が自分の胸を裂いて生まれ出たものだとする発想は、その言葉じたいがそもそも「明星」の歌人の好んだところだが、そんな浪漫的な発語の一切を先に引き取つて「あやしむな」と据えてしまう意氣の健やかさが快い。ためらうことのない若さが、一首のなりたちにも冴え冴えと行き渡つていような印象である。

おもひでは九月に見たる緋ざくらのおわすれ花にも似てしきりなる

この歌になるとうってかわって内省のたまたまがしつとりと映し出されているかのよう
に感じられる。追憶の喩えとして選ばれた
季節はずれの花の、遠慮がちながら勢う様相
が個性的だ。うたいだしから結びまでのよど
みのない流れも好ましい。

なつかしと君よぶ声のあまたたびゆら
ぎしものを歌とも云ふよ

「明星」の歌人はしばしば「歌」そのものを
歌のなかに詠み入れた。彼らにとつて歌は
命であり、恋の心を染め出した尊さを意味し



神奈川・片瀬海岸にて。左より平野萬里、1人おいて与謝野
寛、右端は与謝野晶子（1930年）

ていたように見受けられるが、萬里はそのあ
たりをいたくあつさりともとめている。それ
でいて、若やかな思い入れを声のゆらぎに託
しているところには充分な主張がこもってい
るようで、見過ごしがたい確かさがある。

みじかきと長きと問ふなみじかくば強
く長くばこのまま恋ひむ

おそらく「みだれ髪」の「人ふたり無才ぶさいの
二字を歌に笑みぬ恋二万年ながき短き」をふ
まえているのではないかと思う。この晶子の
歌は解釈がむずかしく諸説あるが、仮に佐藤
春夫の解に従うと下の句は「この恋の二万年
もつづくのを永いと云おうか短いと云おう
か」（『みだれ髪を読む』）という意であり、
萬里はその問いにこのように応じたのかもしれ
ない。二万年とまではいわずとも、恋に長
いも短いもない、短い恋ならよほど強く、長
い恋をよしとするならこのまま長くずうつ
と恋しつづけよう、と告げているのである。
晶子の一首を思い起こさなくても、その意は
読み取れるであろうし、どこか練れた、大人
びたうたいぶりが堂々としている。

男とはまことの枝にいつはりの花を飾
るをよるこぶものぞ

大人びているといえはこの一首など、さら
に軽妙さも加わっていておもしろい。男女の
間からめ、いくぶん俗っぽさも添えながら、
男の性向を揶揄やうするように評している。

玉野花子との恋と死別

恋の歌が多いのは新詩社にあって自然なこ

とだが、その社内において萬里はひと足先に
同人となっていた玉野花子と恋に落ちた。
『若き日』の歌は多くその経緯において生ま
れたものらしい。恋愛至上を掲げる「明星」
にふさわしく、現実の恋のゆくたてが反映さ
れるかたちで華やきのあることが豊かに吐
露とろされたのだろう。それは少しずつ自身の表
現スタイルを打ち出してゆく過程でもあった
ようだ。そして明治四十一年一月、妻であつ
た花子死去。「明星」二月号は巻頭に花子の
遺影を、さらに絶筆の草稿と萬里の手記を載
せた。花子は瞳が大きく、その目線や口元か
らすると意志の強そうな顔立ちである。萬里
の長文の手記は最後の看取りから雪のなかの
葬りまでを涙ながらにしたためている。「明
星」とその終刊直後に創刊された「スバル」
には、おびただしいほどの挽歌を発表したが、
それらを収めたのが全歌集の「二、我妹子」



群馬・法師温泉にて。手前の駕籠中は与謝野晶子、後列左3人目より与謝野寛、井上苔溪、平野萬里（1931年）

の章である。

望月の光を浴みてやはらかに抱かれし
子のつひにかへらぬ

こころよしさらさらさつと東の海ひんがしの
潮に恋をながしぬ

身に沁みて涙くだりぬ秋の声えんやら
やらと車おす声

死をもつて愛すといひし言の葉をうれ
しと今もおもふよ我妹子

むきあひし目のくりくりを見るうちに
時計の如き心地したりき

一周忌を過ぎるまでの時を経ているとはいえ、湧き出る思いを綴った四百首あまりはかなりの迫力だ。用語にも叙述にも銜てまいがなく、むしろ切実な悲しみをさげけた表現で伝えていることの萬里らしさが目にとまる。明治四十年代には自然主義文学の潮流も作用して「明星」の歌人たちの作品に総じて変化が見られるが、萬里は構えのない率直な表現を着実に引き寄せていったようだ。どこか鷗外の歌の味わいに近いおもしろさを感じられる。

与謝野夫妻を文学的に支えた人

萬里は「スバル」の編集発行を啄木や平出修ら新詩社の若手たちと受け持った。「石川啄木全集」（筑摩書房）収録の啄木の日記を開くと、当時の彼らの健闘ぶりや文学意識のこまごまが知られる。晶子は女性歌人としてすでに揺るぎない立場にあったが、夫寛はしだいに歌壇・文壇から距離を置くようになり、西欧遊学から帰ってのちも大きく迎えられることがなかった。大正十（一九二一）年「明星」を復刊したり昭和五（一九三〇）年

には新雑誌「冬柏とうはく」を創刊するなど雑誌発行に執念を燃やす寛と、夫に気兼ねしながら子だくさんの一家を支えるべく執筆に励む晶子とを支援する人びとは多かつたが、そのなかでも萬里は、夫妻の文学を理解し受け継いでゆく意味では最も貢献した一人だったといえる。夫妻を敬愛し、夫妻の引越に從つて自身の住まいも移すほど、それは徹底していた。夫妻の数々の旅にも同行している。いきおい萬里も旅の歌を多く残すこととなったが、ここには昭和期の作のなから敗戦時の一首を引いておきたい。

明治といふよき世の中にわれ生れ生き
永らへてなほ明日を待つ

焦土のなかで「明治といふよき世の中」を思い返し、明日に希望をつなげようとする心がしんとせつない。与謝野夫妻すでに世になく、萬里は晶子の遺歌集『白桜集はくおうしゅう』を昭和十七年九月に刊行したのち、自身の歌をまとめることにさえ優先して『晶子鑑賞』の原稿を書きついでいたらしい。今もなお晶子の作品を読む際に欠かすことのできない大部なその原稿を昭和二十二年一月に完成。翌二月十日に六十二歳の生涯をとじた。

（こんの・すみ「り」とむ」編集人